

紙上講習会「イラン留学体験記」

第2部：イラン滞在中の印象的な出来事



マシュハドのイマーム・モスクにて。黄金に輝くモスクが眩い。

国内デモとインターネット遮断

到着して1ヶ月が経った頃の2019年11月、イラン国内でガソリンの価格が3倍に値上げされた。元来、イラン政府は石油やガソリンに対して補助金を出しているため、日本人にとっては破格なのであるが、経済制裁によって国内経済が悪化の一途を辿る中でこのようなニュースが入ってきた。イランは超車社会であるので、打撃を受ける人が多かったのだろう。これに抗議する人々が抗議デモを行うようになり、一部暴徒化した人々は銀行などを焼き討ちにするまでになった。私が住んでいる場所は閑静な住宅地であったのでデモさえも見かけなかったが、政府はこのようなデモ活動を拡散するSNSを規制すべく、インターネットを遮断してしまった。思えばこの数日前からVPNが切れたり、インターネットの接続が悪かったりと、予兆はあった気がする。突然インターネットが使えなくなり、イラン国内の友人とも連絡が取れない上に、日本にいる家族とも音信不通になってしまった。日本人の友人同士では近年LINEなどが主流であったため、電話番号も知らず連絡が取れない！

と、混乱してしまった。これを機会にお互いの電話番号を教え合い、ネットが遮断されている期間はショートメッセージで連絡するようになった。インターネットが遮断された日は季節外れの大雪まで降る始末であったため、正直なところかなり動揺していた。普段移動手段として使っていたタクシーさえも、インターネット遮断のおかげで利用できないため、その日は通っていた学校を休んだ。大雪のために道が非常に混雑し、交通機能がほとんど用をなさなかったことはニュースになるほどで、友人の中には6時間ほどバスの中で過ごさざるを得なかった人もいた。



季節外れの大雪の後には、寮の前に雪だるまが作られていた。

このネット遮断期間はおよそ2週間に及び、家族や指導教員に心配をかけないように国際電話で連絡を取る必要があった。本に比べて物価が安いこともあり、国際電話の料金も全く高いとは思っていなかった。そうは言っても、頻繁に使っていれば電話代がかさむわけで、たちまち料金不足になってしまった。イランでの電話料金はチャージしておくシステムなので、銀行口座が開設されていれば即座に支払いが可能であるが、当時は開設していなかったため携帯電話を扱うショップに行く必要があった。

このようなネットの遮断は、日本では考えられないような出来事であるが、イランでは時々あることらしい。街中のイラン人は慣れているようで、特に困った様子もなく、目の前の友人や恋人とのコミュニケーションを楽しんでいてその姿には余裕さえ感じた。インターネットがないということだけでこれほど不満を抱くとは思っておらず、いかに普段の生活でネット中毒のようになっているか、しみじみと感じる2週間であった。また、直接会っている人とのコミュニケーションを大切にしようと考えさせられる日々であった。



暗くなる気分でも、美味しいモーニングやおしゃれなカフェで一息

ソレイマーニー司令官暗殺事件

耳を疑うようなこのソレイマーニー暗殺事件は、新年の1月3日に起こった。とはいえ、イランは新年が3月から始まるため、お正月休みももちろんなく、年明け感が皆無の中ではあったのだが…。早朝まで眠れない夜、おもむろにSNSを見ているとこのニュースが飛び込んできた。恥ずかしながら当時の私はソレイマーニー司令官についてほとんど知識がなかったため、事の重大性をすぐには理解できなかった。しかし、色々と調べていくと大変なことが起きてしまったと理解できた。イラクの空港に降り立ったソレイマーニー司令官が、アメリカの空爆により暗殺されたというものである。この人物は、イランの革命防衛隊の軍人で、ISの掃討では特に力を発揮した。IS掃討の点においてはアメリカとある意味で協力関係にあったとさえ言われている。彼は、無論シリアのアサド政権への支援など悪い面が相対的に見た場合多いのであろうと思われるが、ISを掃討したという点では特にイランにとって英雄であった。四年前、語学研修で初めてイランに来た時、ちょうどISが活発な時期であったことを覚えている。イランが今でも平穏を保っているのは彼の貢献があったからといえるであろうし、それ故に支持を得ていたのであろう。

ソレイマーニー司令官の暗殺後、町の動きは非常に迅速であった。暗殺された当日、予定がありお昼に出かけ、夕方に帰宅したが、いつもはのんびりと仕事をするイラン人が半日という驚異的速度で、町中にある看板をソレイマーニーのものに張り替えたり、横断幕を掲げたりしていた。また、その後しばらくの期間にわたって車窓や原付のフロントにポスターを貼っている人がいるなど、その支持の厚さをまざまざとみることができた。

司令官殺害後、7日間の喪が明けると、イランはイラクの米軍基地に反撃をした。幸い、米軍側に死亡者は出なかったが、その後のトランプ大統領の演説で本格的な戦争にならない、とわかるまでは、本当に生きた心地がしなかった。その間不安もあったので、イラン人

の友人をはじめ、タクシーの運転手などと様々なことを話し、現地の人々がどのように考えているのかを知ろうとした。しかし、ほとんどの人が「なんで心配してるの?」「心配しないで」「前も似たようなことがあったし、よくあることだから」と答える人が大半であり、こちらの肝の冷え具合は、逆に理解してもらえなかった。今思うと、慣れない土地で気を張っている外国人である私を少しでも楽にしようと思って、そのような言葉をかけてくれたのかもしれない。家族で仲良くしてもらっていた人たちは、やはり「私たちがこれから一体どうなるかと不安だ」とおっしゃっていた。また、ソレイマーニー司令官に対しての評価は、当然ではあるが、人によりけりであった。「ソレイマーニーは英雄だけど、政治の世界と繋がり始めてから嫌いになった」という人もいた。



このようなポスターが町中のあちらこちらに貼られるようになった。

喪に服す期間、毎日寮の部屋のテレビでニュースを見ていたが、人の力や、エネルギーを非常に感じた。国営テレビしか映らなかったため、かなり偏った報道ではあったが。特にソレイマーニーの御遺体が空港に到着する様子は非常に熱狂的であった。翌日の葬列も、先代の最高指導者のホメイニーの葬列に匹敵するほど大規模であったと言われている。イランでは官製デモなるものが存在するが、このように政府関係者や呼び掛けられた人だけであるならば、あれほどの人が集まることはないであろう。そして、こういったときに「詩の民」の本領を発揮するのだと、文学を研究する者としては胸が熱くなった。喪に服すといっても、静かに過ごすのではなく、歌い手がマイクをもって、それに群集が追随する。その様はまさにシーア派の宗教的行事で、イマーム・ホセインを追悼する「アーシュラー」のようであった。この行事は、シーア派で神聖視されているイマーム・ホセインが渇きの中で命を落としたカルバラーの悲劇が起きた日に、その死を悼むものである。ソレイマーニー司令官が殉教者として非業な死を遂げれば遂げるほど、ホセインと重ね合わせられ、神聖視され、人々は痛みを共有しようとするのだと肌で感じた。実際、その後作られた絵のポスターでは、ホセインと思しき人に抱擁されたソレイマーニーが描かれていた。軍人にとっては、殉教することは本望であるので、葬列での歌では「おめでとう」「うらやましい」といった言葉が合いの手に並ぶことも、不思議な感覚であった。事件から数日で、「ソレイマーニーはまだ生きている」という歌がよくかかるようになった。そしてしばらくの間、テレビでは彼を扱う番組一色で、そこには詩を詠む人が代わる代わるゲスト

として参加し、次々に自作の詩を詠んでいた。悲しみながら詠む物もあれば、英雄叙情詩の形で勇ましく！という人など、様々であった。かなりセンセーショナルで驚いたが、ナショナルリズムを高揚させる方法としての詩というのは、非常に興味深いと思うところであった。



テヘランの南にある宗教都市コムにある、ジャムキャラーン・モスク。ソレイマーニー暗殺事件後、普段は黒の旗が赤になり、復讐を予告しているとされる。ただし、赤い旗が掲げられるのはイランのシーア派独自の行事の際にもあるらしい。

トランプ大統領の演説前に、日本の外務省はイランの危険レベルを1から3に上げてしまい、1ヶ月ほどこれが続いたため、大阪大学側からは帰国を促され、家族からも心配され、しばらくの間は全く気が休まらなかった。あれほどのストレスを抱えたのは、初めてのことであったように思う。

この事件が起きた当時、私は政治や政治家について嘆いていた。すると、師事していた先生がイラン現代詩人で最も有名なソホラブ・セベヘリーの詩を教えてくださいました。当時の私の気持ちを非常に代弁してくれている句であった。

جای مردان سیاست

بنشانید درخت

تا هوا نازه شود

政治家がいるところでは

木に登ろう

さすれば清き風が



ソレイマーニー司令官がホセイン(シーア派の第3代イマーム)と抱擁しているポスター。周囲にはホメイニーや他の殉教者が笑顔で見守っている。



同じくジャムキャラーン・モスク。モスクの本堂の左右の垂れ幕には、コーランから引用した復讐に関する節が、英訳とともに書かれている。ペルシア語だけで書かれていないのは、対外的にアピールするためだろうか。

コロナの流行とそれに伴う帰国

中国や日本でコロナウイルスが流行し始めたのが2020年1月ごろであったが、イランで初めて患者が報告されたのは2月後半のことであった。このニュースが出回り始めてから、私を含めた東アジア圏の人々は差別に直面することとなった。街中を歩いていると、中高生男子の集団が走り去りながら「コロナ、コロナー」とからかってきたり、わざわざバイクから叫ばれたりした。路上を歩いていると、中国人が来たから近寄らないように、と眉をひそめながら友人の手を引く女性もいた（もちろんそういったことをしない人々の方が多く、こうした人々はごく一部であったことは断っておきたい）。イランと中国は経済的に強い結びつきがあるため、早い段階で感染者がいるのではないかと思っていた。友人の間では感染者がいたとしても隠蔽しているであろうと話していた。ちょうど2月の20日ごろにイランの国会選挙があったため、それまではきっと感染者の情報は公開しないであろう、と。残念なことにこの予想は的中した。タブリーズというイラン北西の街へ、先輩と旅行をしてテヘランへと戻る寝台列車の中で、イラン国内で2人の感染及び死亡のニュースが飛び込んできた。まさに国会選挙のキャンペーン期間が終わった直後の報道であった。良くも悪くも、そのニュースの1ヶ月ほど前には、感染者が出た宗教都市のコムに、一泊二日の旅行をしていた。

乗っていた寝台列車は4人のコンパートメントであったが、途中で赤ちゃんを連れた母親が乗車してきた。赤ちゃんの祖父も見送りに来たが、私たちの顔を見ておそらく中国人旅行者だと思ったのだろう、その引きつった表情は忘れることができない。その後、その母親とお喋りに花が咲いた。赤ちゃんの祖父に電話をかけて、こちらの事情を話すと安心していたようだった。



革命記念日に向けた展示。地面にはアメリカとイスラエルの旗が貼られている。革命前の体制側の人々の風刺画が多く飾られていた。

もう一つコロナに関わる印象的（と言うよりはショックな出来事と言った方がふさわしいだろうか）は、タクシーに乗った時に起きた。ある日、知人の家に向かうためにタクシーを配車アプリで呼び、車に乗り込んだ。すると運転手は私の顔をチラチラと見ていると思ったら、数十メートル走ったところで車は停車。「この目的地まではいかない」と言われ、降りるように言われた。乗車してからの運転手の挙動から、私が中国人旅行客だと思ってコロナウイルス感染の可能性を考えて嫌がっているのではないかと思ったため、私は説得することにした。まず、このアプリを使うような外国人は長期滞在しているはずで、私も1年以上ここに住んでいる、と伝え（本当は半年ぐらいだったが、ここでは強調するために実際よりも多く言うことにした）、最後に日本から来たことを伝えると態度が一変。こういった経験は今までも経験してきたが、日本人であるということを言うことで私自身も差別をしているような気分になって、非常に悲しくなった。その後その運転手は「中国人と顔が似てるんだね」「中国人は嫌いだ、倫理観がない」といったデリカシー皆無の発言が目立ち、非常に不快であった。私はその度に「アジア圏の顔なんてみんな似ている、大して変わらない」「日本人でも、何人であっても悪い人は世界中にたくさんいる」と反論したが、態度を改めることはなかった。タクシー乗車後には運転手の評価をつける機能があるのだが、あまりにも腹が立ったので、最低評価にした上で長文のコメントを書いた。翌日か翌々日には運営会社から謝罪の電話がかかってきた時は驚いたが。



イラン北東部の町、タブリーズのバーザールにて。中東最古のバーザールであると同時に、世界で最も長い商業施設。世界遺産にも登録されている。迷路のような構造で、2日間では回りきれなかった。写真はスパイス屋さんで、色とりどりのスパイスが売られている。

ソレイマーニー司令官殺害後、日本外務省発表の危険レベルは3になっていたものの、2月11日の革命記念日後、2に下げられた。ほっとしているところでコロナのニュースが入り、早々に感染が拡大。日に日に感染者が増え、毎日在イラン日本大使館からのお知らせメールに加え、電話がかかってくるようになった(在住日本人が少ないからこそできる技である)。イラン人も日に日に神経質になり、タクシーや飲食店など消毒やマスク、ゴム手袋を徹底していた。道路に塩素を撒くことも頻繁にされており、タクシー運転手の中にはタクシーの中に塩素を撒いていた強者(?)もいた。当然車内は白くなっていた。こうした様子を見ると、正直なところ日本よりもよほど神経質に対策をしている印象があった。



テヘランの中心部、エンゲラブ通り。私の帰国後には、この絵が医療従事者のものになったという。

毎日100人単位で感染者が増え、このままでは出国できなくなる可能性が高いと見た私は、とうとう帰国を1ヶ月早めることを決意した。3月8日にイランを出国することになった。ちなみにこの出国した日にはすでに国内の感染者の合計が5,800人を数えるという凄まじい状況になっていた。もともとカタールの往復チケットを購入しており、帰国日時は変更可能のものにしてはいたが、オンラインでは変更不可能になっていた。当時、既にコロナウイルスの影響で便が減り、高騰していたためである。片道の料金を見ると、20万円を超えるまでになっていた。試しにカタールのテヘラン支局に電話をかけても、当然つながらず、払い戻し手続きをして別の会社の便を予約することにした(ちなみに払い戻しが完了したのは6月半ばであった)。席が空いているのは、国内のサイトからしか予約ができないマハーン航空のみであった。マハーン航空は件の革命防衛隊が株を持っている会社で、経済制裁の影響を直に受けていたため、イラン国内からしか予約ができないと言うからくりである。

日本への直通便は大手の航空会社を含め一つもないので、いずれにせよ乗り継ぎが必須であった。マハーンでタイまで乗り、経由してタイ航空の関西空港行きを予約した。異なる会社の飛行機であったため、外に出ることができない上にトランジットが23時間と長時間の滞在を余儀なくされた。ここでは在タイ日本大使館の方が尽力してくださった。マハーンの便には他にも日本人の大使館関係者が団体で乗っていたのだが、私と後輩以外の人はみな東京行きであったため、荷物のタグを間違えて東京行きと付けられてしまったのである。懸念は杞憂で済んだのであるが、万が一のことを考え、ということで大使館の方が働きかけてくださった。日本に到着し、飛行機を降りると私と後輩の名前が大きく掲げられたカードを持った人がいたのには非常に驚いた。空港内の保健所に連れられ、PCR検査を受けた。数時間後に結果が出て、幸い陰性であった。2週間の自宅隔離では、毎日保健所から電話がかかってきて検温結果を報告したことも今となってはいい思い出である。

本来予定していた留学期間は4月の半ばまでであったので、少し帰国を早めなければならなくなったのは残念であった。このコロナ禍では、次いつイランに行くことができるかわからないが、この貴重な経験はこれからの研究生活でも生きてくることであろう。



普段は人で混雑するエンゲラブ通りも、もぬけの殻であった。



寮の前にいつもいた猫。

最後まで読んでいただきありがとうございました。